

信州の石仏

米本光徳

幼き頃、それは道端に当たり前のように立っていた。

誰が供えたのだろう、基壇には春にはレンゲが、お盆にはナスやキュウリがあった。珍しい風景ではなかった。しかし、子どもたちはその石仏に込められた深い意味あいなど知る由もなく、無邪気にそれを眺めていた。

信州の路傍にはこれらの石仏がことのほか多い。なかでも北の小谷、安曇野、南の辰野の三つの地域には同じ信州にありながら、ある種の石仏が特徴的に分布していた。ここではそれらとその背景にある歴史風土の関係について考察してみたい。

1. 信州の歴史と風土の概要

山岳国・信州は、北アルプス(飛騨山脈)、中央アルプス(木曾山脈)、八ヶ岳連峰をはじめとする山々が連なり、また、北には修験道で名高い戸隠連峰もある。美ヶ原や霧ヶ峰の高原もよく知られる。

そして盆地の中央には日本列島を南北に引き裂くように糸魚川・静岡構造線(フォッサマグナ)と呼ばれる大地溝帯が走り、またその線に沿うよう基幹道路があった。産業としては気候を反映してリンゴやワサビ、蕎麦が栽培され、工業の分野では精密機械工業も盛んである。

文化の歴史は古く、先土器時代にも溯る。今日、縄文時代の遺跡も数多く発掘され、例えば信濃大町の上原遺跡が名高い。別に八ヶ岳山麓の遺跡からは『縄文のランプ』と名づけられる特異な吊手土器も検出されている。

中世の歴史では川中島の戦いが最も名高い。また、今回見ていく石仏や、千国街道(塩の道)とかかわる民俗学の分野でもこの時代に興味深いものが多い。今に残る信州の文化はこの道を通じてこの時期に一齐に花開いたといってもあながち間違いではないだろう。

近代においては白樺派に属する人々の活動による信濃教育の隆盛を見た。音楽の分野でも『早春賦』をはじめ数多くの懐かしい歌曲がその風土を背景として生み出され、文化の香りは高い。

一方、あまり歴史の表舞台には登ってこないが、先の大戦とのかかわりの中で、『負の遺産』として今に引き継がれたものもある。それはわだつみの声に見られる特攻隊や松代の幻の大本営、あるいは硫黄島決戦で玉砕した関係者の存在がそれにあたる。ある時期、信州は『神州』とも呼ばれた。

また、この地方の文化は山とのかかわりはずして考えるわけにはいかない。古くは山岳信仰とかかわって播隆上人の槍ヶ岳開山、また戦国の世の佐々成政の針ノ木越えが名高い。明治の治世を迎えるとウォルターウェストン、小島烏水らに始まる近代登山が芽生える。以来、数多くの岳人が四季を問わず訪れ、それらを通じて山の文学の世界でも北から白馬岳を舞台とした強力伝(新田次郎)、穂高岳の水壁(井上靖)、また南では木曾駒ヶ岳を巡る聖職の碑(新田次郎)等の名作も誕生した。

2. 石仏の定義と歴史

ところで、話を進めるに当たって、石仏とはどのようなものを指すのか、まず、この点をはっきりさせておく必要がある。

とはいえ、それを定義づけることは易しいようで実はかなり難しい。試みに手元の辞書を引くと、単純に『石に刻まれた仏像』とか『石で造られた仏像』とあるだけである。しかし、別の資料では岩壁に刻んだ磨崖仏も石仏とされる。また、今回見る道祖神や、田の神、塞の神にしても、それらは別に石神として区分すべきものなのかもしれないが、やはりこれらも広い意味では石仏・石像である。というより、今日、一般の人々は、後者こそ、ごく普通に石仏であると受け取っている。

それはさておき、その普及の歴史はおよそ次のとおりである。

まず、奈良時代のものとしては、奈良県桜井市石位寺の三尊石仏がある。

続く平安時代になると、全国に多くの石仏が造立され、前期には滋賀県の狛坂廃寺磨崖仏、後期には大分県の臼杵、そして国東半島の熊野磨崖仏が造像された。ほかに、富山県中新川郡日石寺の不動三尊や栃木県宇都宮の大谷観音磨崖仏などもよく知られるが、これらはこの地方の山岳信仰とも密接に関係して造像されたものである。

鎌倉時代の石仏には大分県大野郡犬飼町の不動磨崖、奈良県宇陀郡室生町大野寺の弥勒磨崖や京都市上京区石像寺の阿弥陀三尊、奈良市十輪院の地藏菩薩、群馬県勢多郡赤城村の不動などがある。また、この時期には宝塔や板碑なども造られるようになった。

しかし、南北朝、室町時代になると事態は一変する。

石仏の造立は庶民層にも広がり、小型の石像や五輪塔、板碑などが大量に造られた。

そして江戸時代になるとそれはさらに全国的な傾向となり一気に普及した。

その例を拾い集めてみると、次のようなものがある。

道祖神、庚申塔、馬頭観音、二十三夜塔、大黒天、地藏菩薩、念仏供養塔、如意輪観音、十一面観音、大日如来、十三仏、千部塔、廻国塔、十二支像、三界万霊、徳本名号碑、御岳権現、三峯権現、蚕神、猿田彦神など、その数は何十種類にもものぼる。

造立場所は寺院や神社の境内をはじめ、村々の境、路傍、峠、さらには個人の屋敷内にもまで及んだ。

しかし、それにしても信州の造立量は大量である。これらの石仏は後世の私達は何を語りかけているのであろうか。

3. 安曇野の石仏

まず最初に安曇野のケースを見てみたい。

ここは道祖神の『ふるさと』といわれる。南北両安曇郡にはあわせて七百体、南安曇郡に限ってもは四九八体ある。それは全国でも例を見ない数である。

なかでも穂高町には一二五体が祀られている。それらは男女二尊神からなる双体道祖神であるが、これはかつてNHKの連続テレビドラマ『水色の時』でも取り上げられた。道祖神はまさに『安曇野の顔』であった。

ところで、道祖神は一般的に日本古来の邪悪をさえぎる衢神と中国の道祖(道の神)との集合から生まれた路傍神とされる。

しかし、どうだろう。これほど複雑多岐にわたる内容を秘めた石仏は他に例をみない。

それらは地方によっては塞の神、サイの神とも同じ意味合いをもつ神として扱われたが、別に猿田彦神や庚申信仰とも合流し、数多くの信仰心を内包する形でその後の歴史に引き継がれたのである。それらは道の神の性格に加えて、五穀豊饒、夫婦和合の神とされた。

その像容は見たような神々の性格を反映して様々である。

男女の握手像、祝言像が最も多く、酒器像、笏と扇をもった像がそれに続く。合掌像も多い。表情も仲むつまじく微笑みあうもの、遠慮がちに寄り添うもの等、ひとつとして同じものはない。なかには子どもたちによって彩色されたものもある。唇にちょこんと紅をさされた女性像など、古来からここに生きる人々の優しい信仰心を映し出しているに違いない。

少し離れるが、松本の東、入山辺地区にはもっと大胆に男女の愛欲の姿を表現したものもある。さらに東に目を転じると、群馬の榛名山麓には浮世絵の春画を思わせるものさえあった。しかし、程度の差こそあれ、このように男女の愛のカタチを白日のもとにさらして石仏に彫った例は他にはないのではないか。群馬県の例などそれは神とは名づけられて

いるものの、その実は『人物像』と呼んだ方が当を得ている気もする。

話をもどして穂高町には別に屋根型をした厨子風の囲みの中に像を浮彫にしたものも多い。また帯代(結納金)を記入した像も見受けられるが、これは当時、村々の間で道祖神を『サラウ』風習があったせいである。

また装飾的な意味合いも含めて、紀年銘のはいったものが多いのもこの地区のもうひとつの特徴である。古いものは、正保元年(一六四四年)、江戸時代初期の年号が見える。

では、安曇野にはなぜこれほど道祖神が多いのだろうか。

前述したように、道祖神は街道の岐路や村の入口に立って悪霊から旅人を護り、また、それが村に侵入するのを防ぐ役目を第一として造立された。しかし、穂高町の場合、その多さは尋常ではない。かつてここにはこれほど大量の神や仏を必要とするほど、悪霊が充満していたとでもいうのだろうか。

歴史をひも解くと、実際そのようである。

もちろん、実際に悪霊がいたわけではない。しかし、安曇野は江戸時代後期まで水不足に悩まされた不毛の地だった。

アルプスの上流で降った雨はやがて梓川や中房川、また高瀬川や烏川へと流れ込んだ。

ところが、水は扇状地に出ると忽然と姿を消し、伏流水となったのである。烏川は別名『空洲川』とも呼ばれ、よくその状態を言い表している。したがってこの地方の土地は痩せて乾き、逆にいったん水がでると、河川はその急峻さゆえ氾濫を繰り返した。それゆえ、農民の貧しさは時代を越えて決定的だった。

そして享保、天明、天保の大飢饉、宝永、安永の大震災、明暦、明和の火災、また享保、安政の疫病が、その貧しさにさらに追い打ちをかけた。いったん疫病がはやると、幼い子どもからバタバタと死んでいった。

しかし、これらの災害に対して幕府はなんら有効な手立てを打つことはできなかった。朝廷とて飢饉や天災が起こる度に祈祷や改元を行うのが精一杯の有り様であった。そんな状況の中、食うや食わずの人々は、大規模な農民一揆を引き起こすに至る。

ここにきて名も無き庶民は、もう野に神や仏を建て祈るしかなかった。

人々は、打ち続く天災や病魔、そして時には苛烈な年貢の取り立てという『人災』を塞ぐため、自らの思いを道祖神に込め、庚申塔や馬頭観音とともに村の境や入口に建てたのである。それが証拠に安曇野の道祖神は比較的造立年がはっきりしているものが多いが、これらの造立年はそれらの天災や大飢饉の勃発した時期と妙に一致している。

とはいえ安曇野の道祖神はそんな歴史の裏側をまったく感じさせないほど、なんとにこやかに微笑んでいるのだろう。石仏の顔立ちからはとうていそれが刻まれた時代の苛酷な状況は想像できない。むしろそこからは農民の『生の讃歌』が見えてくるほどである。十二単の装束に身を包んだ女性像など、あでやかな雛人形さえ連想させる。

しかし、見たようにその背景には人々のとほうもない苦難の現実があった。道祖神の微笑みは人々の困窮のまさに裏返しであった。

名もない庶民は記録文献に載るような歴史は残さない。残すとすれば石で造った石塔や石碑、そして石仏そのものである。彼らはなす術なき日々の生活の向こうに、それでもより豊かで確かな生活を夢み、あるいは子孫の繁栄を願ってこの道祖神を造立した。それがこの地方に道祖神が大量にある真相であろう。

道祖神はその名の示すとおり道の神である。

悪霊が村々に侵入するのを防ぐ意味あいをもって道の辻々にあった。五穀豊饒、夫婦和合の神ともされた。しかし、これまで見てきた庶民の歴史を考え合わせると、この神の本質に迫るには、『道』より『祖』に着目するほうがより真実の背景が見えてくるような気がする。

4. 辰野の石仏

次に南部に位置する辰野の石仏を見てみる。

ここにはいっぼう変わった道祖神があった。

その一つは肉太で厳格な造形になる大型の神々である。『大國主大神』『須勢理比売命』がそれに代表される。男神は『寿』と書かれた盃を捧げもち、腰には大刀をさしていた。女神は提子をもつ。碑の上部には神仏の混交を意味する吉祥紋の『日・月』が配置され、中央には『宝珠』も刻まれている。

二つ目は翁媪姿の双体道祖神である。その形態は安曇野と同じだが、安曇野の神々が若々しく華やかなのに対して、辰野のそれはなんとも神代を引き継いで古風な顔立ちである。その中に翁と媪が一本の巻物を抱くものがあつた。その中央には『天与是』の文字が見える。

この像は次のような伝承をもつ。

『疫病神』がいた。彼は、毎年、庶民を監視し、彼らの一年の行いを一本の巻物にしたためて天帝に報告する役目を負っていた。ところが疫病神も神の端くれ、毎年、神無月には神々の里・出雲へとでかける定めとなっていた。すると留守中、彼は道祖神にこの巻物を預けた。先の翁と媪の手にあるものはその疫病神の『閻魔帳』であつた。

首尾よく集会を終えて村へもどった疫病神は、預けた巻物を返すように迫る。しかし、道の神は、『巻物は小正月のトンドで焼失した』と返却を拒んだ。お陰で閻魔帳は天に届かず村人はその『難』を逃れたというのである。

閻魔帳をもつ道祖神は、別にもう一体あるが、前者が厳しい表情であるのに対して、こちらは神でありながら、それでいて村人の仲間であるような、なんともユーモラスな表情をしている。前の二人は疫病神に真っ向から対峙する姿を、後の二人は疫病神から村人を護り得た喜びを表しているのだろうか。

三つ目は『八衢毘古』、『八衢比売』、『岐神』の神々を表す文字碑である。

続日本紀には、これらは道の分岐点を掌握する神々として登場するが、天平七年(七三五年)、道饗祭の時に共に祀られたという。その年は疫病が蔓延していた。

では大國主大神を初めとするこれらの三つの道祖神に共通するものはなんであろう。

それらは、記紀神話の國の様相を色濃く反映していた。

しかし、なぜ辰野にはこのような道祖神が多いのか。

その背景にはひとつの確かな要因がある。その造像には幕末から明治にかけて信州・伊那谷に広がった国学が影響していた。当時、辰野には倉沢義随を初めとする多くの国学者がいて、その普及と啓発に努めていた。当然、ここにある道祖神もそれらの影響を受けてあった。

とはいえ、そんな神話の世界にあって、辰野には別に庶民の顔をもつものがないわけではない。馬頭観音や庚申塔もある。その中でも万五郎地区には珍しい道祖神があった。

石像には翁と媼におおいにかぶさるように一羽の鶴が彫られ、基壇には亀の姿があった。

作者は不老長寿を願ってこの道祖神を造立したのだろうか。それはあまりにも『偕老同穴』という庶民の愛の形がよく似合う姿である。萬延元年の作という。

5. 千国街道の石仏

次に、塩の道として知られる千国街道では、安曇野や辰野とはまた違った祈りの風景を見ることができる。

千国街道は日本海、北陸道から、小谷、白馬、大町と姫川沿いを北上し、安曇野、松本平から信州の東山道、また木曾街道へと通ずる道である。そのもつ性格から『塩の道』とも呼ばれる。その距離は糸魚川から松本まで三〇里(一二〇キロ)にも及ぶ。

この街道、越後では松本街道、信州では糸魚川街道と呼ばれ、かつては信州と越後を結ぶ大動脈であった。明治中期までは塩、魚、昆布、麻など海陸の物資が行き来し、人々の

生活と経済をささえた道である。輸送はすべて牛馬とボッカ(歩荷)によった。戦国期、越後の上杉謙信が甲斐の武田信玄に塩を送ったと伝えられるのもこの街道である。

試しにこの地域にある石仏の種類を書き上げてみる。

道祖神、庚申塔、二十三夜塔、馬頭観音、大黒天、大日如来、地藏菩薩、念仏供養塔、如意輪観音、不動明王、札所巡礼供養、西国、秩父、坂東の百番供養塔等、その数にはバラつきがあるものの、ここにもおびただしい種類の石仏があった。馬頭観音に至っては途方もない数である。

今日まで彼らの前をどれほどの数の旅人が通り過ぎていったことだろう。

石仏は古来よりそこにあって動くことを知らず、一年中、暑いひざしを受け、風雨にさらされ、そして雪に包まれ、眠るようにして今日までひとところに立ち続けてきた。

風化が進み、かつての面立ちを失っているものも多い。損壊して手足を失っているものもある。今、彼らは風の声を聴きながら、やがては土に還ることを願っているだろうか。

そんな中でも佐野坂から千国にいたる街道筋には特徴的な石仏が群集してある。

大町市と白馬村の境、南北の分水嶺に当たる佐野坂には、行き交う旅人を見下ろすように一定の間隔で並ぶ石仏があった。それらは如意輪観音であり、十一面観音であり、いずれも西国三三カ所霊場の仏である。その像容は立像、座像、半迦思唯像とそれぞれであるが、それらはひとつひとつが当時と同じ霊気を発しながら今にあった。これらは文政一二(一八二九)年、高遠の伊藤堅吉らの作によるという。

しかし、なぜここに観音菩薩が集中してあるのだろうか。

それは西国巡礼を果たした得た人々の祈願の表象ではあるが、一方、その集積は千国街道のもつ性格と無縁ではあるまい。

当時、この峡谷沿いに続く街道の通行は、特に厳しかった。時に遭難者も出た。それゆえ人々は地獄の苦しみを救うと説かれた観音菩薩をことさらこの地を選んで建てたのではなかったか。それらは道標としての役割を果たすとともに、旅人の息災を願い、不幸にして行き倒れた人々の供養を兼ねたものであった。

続く白馬、観音原や、小谷、親の原にも百体観音がある。

江戸末期、高遠の石工によって彫像されたものである。これらは後年、近くの集落から集積されたものであるにしても、その立ち並ぶ姿はまさに西方浄土の縮図を思わせる。

しかし、裏返せば千国街道にはこの石仏の数だけ難所があったということである。近年大規模な土石流が発生した蒲原沢も、当時の街道を裂くようにこの北に位置していた。

どうだろう。同じ信州でありながら信州の三つの地方の石仏は、ほぼ同じ時代を背景としているにもかかわらず、それぞれの地方の特色ある風土や庶民信仰の有り様を密接に反

映してあった。

安曇野の場合、その造像の背景にはその根本に貧困があった。辰野のそれは学問を背景として記紀神話の國を映し出す。そして千国街道の仏は厳しい自然を背景に行き倒れた人々の供養、また鎮魂を目的とした。

6. 石仏と文化財保護

ところで近年、文化財の保護が叫ばれる中で、これらの石仏は文化遺産と総称して扱われることが多い。確かにそのとおりである。しかし、見てきたようにそれらの背景を考え合わせれば、やはり呼称は統合せずに『生活遺産』、『信仰遺産』と分けて呼ぶほうがふさわしいように思える。その方が石仏とその時々の人々の結びつきを適切にとらえられるように思うのである。

また、その保護を考えるなら、石仏そのものの保存はもちろん重要だが、それ以上にそこに込められた人々の造像の精神にもあわせて目をむける必要がある。単にそのモノだけを保存してみてもそれは単なる『保管』に過ぎない。そんな精神の伴わない『保存』のあり方は、やがてそのモノさえも喪失させてしまうに違いない。文化財の保護とは言い換えれば、そこに込められた人々の生きざまも含めて丸ごと引き継ぐということであろう。またそのとらえ方は今に生きる人間の生き方を大切にする心にもつながる。それこそが文化財保護の精神の神髄であり、まためざすところであろう。

時に今、若者の間では、ささやかながら野の仏を巡る旅が始まり始めているという。

なぜだろう。おそらくそれは現代の科学技術の発達や進歩と無関係ではあるまい。

現代の科学文明のスピードはつい一週間前の技術が今日はまだ時代遅れになるほどの勢いである。一月前のそれなどもはや化石同然である。

しかし、ついて行くのが精一杯のような進歩のありようはやはり正常ではあるまい。人間をおきざりにするような『シンポ』は、もはや『進歩』ではない。それはもはや『退歩』と呼ぶべきものである。かつて明治維新、『ザンギリ頭をたたいてみれば文明開化の音がする』という言葉が生まれたが、そういう意味では今の文明の有り様は『文明退化』と言い換えた方がいいようにさえ思える。

しかし、現代、石仏を訪ね始めた若者たちの増加は、彼らがそのことに気づきはじめたことを物語っている。彼らは何も高尚な宗教家や詰め込みと偏差値教育にたけた教育者に導かれてそうしているのではない。自ら求めて止まぬ心が自然に彼らを石仏の前に立たせるのである。彼らは道祖神を初めとする数々の野仏たちと対峙する中で、ひととき立ち止

まり、その内面に秘められたいにしえの心に触れる中で、自らの心の平安を求めたに違いなかった。

そんな彼らの祈る姿は、その時代背景は違うものの、かつてこの地にあった人々の心とも共通するものであろう。

7. もうひとつの石仏

終わりに、ここまで三つの地域の石仏の違いについて見てきたが、ここでは逆にこれらの地域に共通してあるもうひとつの石仏にふれておきたい。

それは今まで見てきた道祖神や観音菩薩のようにそれほど注目される存在ではない。写真や絵になる存在でもない。それにその造塔数は庚申塔と一、二を争うほどに多かった。それは半ば当たり前のようにあったと言ってもいいだろう。

三つの地域には共通して馬頭観音があった。

ところでこのように信州に特に馬頭観音が多いのは、かつてこの地方が養蚕地帯だったからである。本来、馬頭観音はその字の示すように馬供養の仏であるが、これを養蚕守護の仏としたのは庶民信仰の不思議である。別の地方では馬魂碑もある。思えば信州ではかつて馬と蚕は生活の根源であり、人々は彼らと共同生活を送っていた。

その表情はどうだろう。いずれも恐ろしい憤怒相をしている。他の観音が慈悲の様相を呈しているのに対して、目は細くつりあがり、口はへの字に結んで思わずギクリとさせられる。手には威嚇するように剣をかざし、すきがなかった。常に野にあり何の手入れもされない分、凄みがきわだっている。その怖さは町中でみる怖さではない。その姿は押し寄せる悪霊の前に敢然と立ちはだかり貧しさにあえぐ人々を毅然として守ろうとしているように見える。考えようによっては、これこそ『信州の顔』であろう。

しかし、この形相は観光立国をめざす信州においては、決してパンフレットの表紙を飾ることはあるまい。その顔は、この地方の苦悩の歴史をあまりにもストレートに映し出しているように思えるからだ。

石仏を尋ねるなら花の頃といわれる。二番目は雪の頃だろうか。

数ある石仏の写真集も、その背景に花や雪、また、秋の収穫風景ををあしらったものが数多い。もちろん、道祖神も観音菩薩もまた記紀神話の國の石仏にもそれが実によく似合う。

しかし、本当に石仏の心との『対峙』を望むなら、周囲に何も無い『早春』、あるいは『晩秋』がいい。

花や雪に囲まれて立つ石仏は確かに美しい。しかしそれは風景としての良さであって、その内面を理解するにはかえってそれが邪魔になるように思えるからである。

それにしても石仏の数多く残る里は、どこも必ず人情が豊かである。民俗もよく残っている。それはその風土の中に、先祖と伝統を大切にす人々の生き方がそのまま引き継がれているからであろう。

(よねもと・みつのり=京都府総合教育センター研究主事)

参考文献

- 日下部朝一郎『石仏入門』(国書刊行会)
『石仏を歩く』(庚申懇話会)
「路傍の道祖神」(愛の神々・写真集)
『道祖神散歩』(道祖神を歩く会)
田中欣一『塩の道・千国街道』(銀河書房)